

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02329

研究課題名（和文）近現代日本の仏教絵本におけるブツダのイメージ研究

研究課題名（英文）A Study of Buddha's Image in Modern Japanese Buddhist Picture Books

研究代表者

森 覚（Mori, Kaku）

大正大学・その他部局等・非常勤講師

研究者番号：00646218

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で明らかにしたのは、近代日本の仏教絵本で表現されてきたブツダのイメージは、実在の本人そのものではなく、あくまでもメディアで表現される似姿（代替）であり、必ずしも過去に実在したブツダを忠実に再現するものではないということである。むしろ絵本でみられるブツダ像は、時代とともに移りかわる思想や価値観などを反映しながら、人々の願望に応じて創出される。また、メディアのブツダ像は、真実と虚構とが入り混じる記号であり、メディアを介してそれに接した諸個人に作用し、人々の思考・行動・感情を操るイデオロギーであること、さらには、国家や教団などといった共同体の集団意識や行動原理の拠り所となる「神話」になり得る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の人文学分野では、メディアによって形象化されるイメージの議論が盛んに進められている。本研究は、仏教絵本で表現されるブツダのイメージから近代以降の人々に共有された仏教観がいかなるものであったか、またそうしたイメージは、メディアを通して人々へどのような影響を及ぼし、新たな仏教文化を形成したのかを明らかにする点に学術的意義がある。イメージが個人や集団の思考・行動・情動に与える影響については、宗教文化にかぎらず、メディアを通して発信するPR、ブランディング、観光政策などでも扱われる問題である。本研究の社会的意義は、人文学に留まらないさまざまな領域のイメージ研究に応用できる点に見出せると考える。

研究成果の概要（英文）：What this study reveals is that the image of the Buddha in modern Japanese Buddhist picture books is not the actual Buddha himself, but rather a media-represented likeness (substitute), not necessarily a faithful reproduction of the Buddha as he existed in the past. Rather, the Buddha images seen in picture books are created in response to people's desires, reflecting changing ideas and values over time. The images of Buddha in the media are symbols that are a mixture of truth and fiction, and can be ideologies that affect the individuals who come into contact with them through the media and manipulate their thoughts, actions, and emotions, as well as "myths" that serve as the basis for the collective consciousness and action principles of communities such as nations and religious orders.

研究分野：表象文化論

キーワード：仏教絵本 ブツダ メディア 宗教表象 イメージ 再話 再生産 イデオロギー

1. 研究開始当初の背景

近年の人文分野では、メディアによって形象化されるイメージの議論が盛んに進められており、その動向は、仏教研究にも及んでいる。

アメリカの仏教学者ドナルド・ロペスは、*Critical Terms for the Study of Buddhism* 所収の Buddha という論文において、ブッダのイメージへと向けられた思想や見解の問題を論じる。古代インド以来、アジアの仏教徒が崇拝するブッダの容貌は、超越性の象徴である三十二相八十種好という人間離れした身体的特徴をそなえる形象で表わされてきた。

しかし、19 世紀後半の西欧仏教学では、ブッダを歴史上の人間として捉え、近代合理主義にもとづき、その特異な身体表現を、常人と同じ現実的肉体と見て解釈しようとした。この点についてロペスは、肉髻と呼ばれる仏像頭部の突き出た瘤状の部分をターバンや王冠、巻き毛等と解釈した学者たちの見解を紹介しており、それらの事例によって、西欧の仏教学が形成したブッダのイメージが、アジアで信仰されるブッダ像とは異なることを鮮明にする。

論文 Buddha は、頭部の肉髻をめぐる解釈の多様性を示すことにより、特定の思想や価値観を背景としながら、ブッダが異なるイメージで思い描かれ、観る者からも別の解釈が加えられてきた事実を明らかにする。

ただし 2014 年に刊行された『ブッダの変貌 交錯する近代仏教』で林淳が指摘するように、ロペスの論考では、ブッダのイメージに関する具体的な考察がなされていない。また、西欧の人間のブッダ観をいかに捉え、自分たちの超越的ブッダ観の中へ取りこもうとしたのかというアジア側からの具体的な検証も不足している。林は、今後こうした課題へ取り組むには、「仏教学の方法では、難しいかもしれないが、他の学術的な方法や視角を駆使すれば可能になるかもしれない」と述べ、学際的な仏教イメージ論の展開を提案している。

ロペスや林が論じ始めた、このような研究を進展させるには、ブッダのイメージを単に人から見られる像としてではなく、特定の共同体、あるいは、共同体間の文化的交流により形成される社会的機能を持つ創造物としてとらえるべきである。なぜならばブッダのイメージは、アジアの仏教信仰や近代仏教学の枠組を超えて、他宗教や通俗的な宗教観からの影響を受けながら、思想のみならず、国家、経済、階級、習俗、芸術、世相、家族、ジェンダー等の諸観念を背景に形成されるからである。

林が言及する仏教学的イメージ論の展望に応えるためには、メディアが表現するブッダのイメージが時代と共に変容してきたことを明らかにするだけで十分だとはいえない。それをなしえる手立ての一つとしては、同時代における社会情勢との関わりの中で、いかなる意図や願望のもとでブッダ像が創出され、創りかえられることを通して、いかなる類型的なイメージが近代日本人の々に共有されたのか。また、人々は、ブッダのイメージを利用することで、特定の個人や集団の思考、行動、情動にどのような作用を及ぼし、新しい文化現象を生み出す糧とされてきたのかを解明していく文化学的視座をもつ研究が必要である。

2. 研究の目的

本研究では、近代の日本で出版され始めた仏教絵本にみられるブッダ(釈迦)のイメージ(表象)を考察する。メディアで表現されるブッダは、仏教経典に記述される内容や諸宗派の教理、19 世紀末の西欧諸国で発達した近代仏教学の学知を取り込み形象化される、読者を信仰世界へと誘導する表現物である。

一方、メディアで表現されるブッダのイメージは、時代の思想や価値観、通念、習慣、世相、ならびに通俗的な宗教観や、キリスト教等からの外的影響を受けつつ、既存の宗教美術及び宗教物語を再構築することで象られた、虚実入り混じる人為的に生成された創作物でもある。

そこで本研究は、近代以降、仏教の根源的人格とされたブッダ像が、時代と共にさまざまな文化的事象と融合し、社会的に形象化されたものであることを、関連する諸作品を視野に入れつつ、絵本におけるイメージの再生産という観点から解明する。

これまで研究代表者は、『仏教絵本の研究 宗祖伝絵本の形成』などの論文を発表し、仏教絵本の研究を継続してきた。そこで一貫する論点の一つとして着目したのが、思想や世相等を反映しながら繰り返し再生産されてきた物語のキャラクター像である。

教育的読物としての性格を有する絵本には、読者を教導するためのさまざまなイデオロギーが組み込まれており、仏教絵本では、最澄、空海、法然、栄西、道元等の仏教各宗派を立教した宗祖が、そうした体系的諸観念を具現化したキャラクターとして表現される。

たとえば、浄土真宗の親鸞像は、史的親鸞の実像を示す文献資料がほとんど発見されていないのにも関わらず、本願寺教団を構築するために必要な親鸞像や、江戸時代には、親鸞伝まで制作された。また、大正時代になると倉田百三の『出家とその弟子』をはじめとする仏教文学やキリスト教から影響を受けた親鸞も描き出される。

さらに日蓮宗の日蓮は、幕末から 15 年戦争時までに刊行された絵本などの出版物において、外敵を調伏する国家ナショナリズムの高僧とされ、戦後は、民主主義を体現する庶民出身の仏教者として語りかえられる。つまり宗祖像は、過去に実在した本人の生涯を再現することよりも、

むしる各時代の読者の関心や世相を反映したイメージとして創出される。

同様の表現傾向は、仏教絵本のブッダ像にも同じく認められるものである。19世紀におけるヨーロッパ歴史学の研究対象であったイエス・キリストと対比され、一つの宗教を確立した歴史的な人物としてとらえられたブッダの近代的イメージは、近現代の仏教絵本で表現されるキャラクター像にさまざまな影響を及ぼしている。

本研究は、近現代の日本における社会の実情や人々の心情と深くかかわりながら、絵と文を主体とした絵本表現により、多種多様なイメージへと繰り返し再生産され、語りかえられてきたブッダ像の諸相を明らかにするが、こうした着想は、過去の宗祖伝絵本研究から見えてきた問題点に起因する。

3. 研究の方法

(1) 表象の改訂と再生産

本研究の課題名にも記したブッダのイメージは、ブッダの表象とも言い換えることができる。表象 (representation) は、イメージ、シンボル、記号、表徴といった言葉の意味に類し、学術分野によって定義の揺らぎが認められる多義的な概念となる。美術史学、芸術学、文学、文化学では、言語、視覚、音響など、何かしらの媒介物を用いてある対象を表現すること、あるいは、ある対象の「代行」「代替」として表し象られたものという定義に限定されることが多い。つまり、表象という概念は、メディア表現により人間の身体内部に生じる観念的な意識、思考、心像などを、物質的に「再現」という意味を持つ。

メディアと表象の研究は、すでに広範囲の諸分野で確認されている。なかでも物語表象の再生産に関して示唆に富む論考を発表しているのが、比較文化学者のジャック・ザイプスである。民俗学的な立脚点から、おとぎ話という物語形態に見出される社会的・政治的機能について考察するその研究では、「ある世界観、歴史全体を見通すある視点、あるイデオロギー」を物語にまとう象徴行為として書き、語られ、文芸化されてきた、18世紀以降のおとぎ話 (メルヒェン、Märchen) をとりあげる。彼の著書『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』(Fairy tales and the art of subversion: the classical genre for children and the process of civilization, 1983年) では、社会や人々の政治的無意識により再生産されるおとぎ話とイデオロギーの議論を始める端緒として次のような疑問を投げかける。

作者たちは、どのように、なぜ、おとぎ話を通じて、子どもに、あるいは大人が抱いている子どものイメージに、働きかけようとしたのだろうか。そうした作者たちは、既成のおとぎ話の言説にどう反応し、それを自分たちの要求や社会の趨勢に合うように変える仲介をしたのだろうか。

ザイプスの試みでは、権力、支配、規範、秩序、権威といった政治的観点から、おとぎ話を語りなおす際に生じる、選択・除外・報償という創作行為の歴史的プロセスに関しての人々の認識を理解しようとする。つまりそれは、再話 (story retelling) 行為により、おとぎ話という物語表象が人為的に操作される過程に介在してきた時代や地域ごとの社会的条件に方向づけられる人間の創造力や恣意性、欲望を解明する研究となる。

再話とは、読んだり聞いたりした特定の内容を、現代風に書きなおし、語りなおすことであり、伝統的な物語の継承と改変を試みる再生産の行為となる。ザイプスは、神話及びおとぎ話といった物語の再話が、社会的、政治的、文化的要因と絡み合う特定の動機によってなされてきた歴史を次のように述べている。

古代社会、異教の部族、異教の社会の産物だった神話は、口頭で伝承されたが、結果的にはキリスト教、家父長制擁護の書き物にされてしまった。神話はある動機のもとに見直され、再秩序化され、洗練される過程を経てきたし、今もその途上にある。

物語は、それが繰り返し語りなおされるなかで、時代の変遷や地域の差異により移りかわるイデオロギーを取り込み、新たな解釈が加えられ、再生産される。こうした物語の再話には、複製と改訂という二つの手法が見られる。その一つである古典的おとぎ話の複製は、「伝統的なものの見方、信条、行動を強化する類型的な思想やイメージの再生を」図る行為となる。これに対して改訂は、「書き手の批判的で創造的な思考を組みこんだ新しい何かを作り出す、という目的をもっている。古典的おとぎ話の改訂版は、価値観の変化に応じて、伝統的な類型、イメージ、記号に対する読者の考えを変えようとする」ものとして成立するのである。

(2) 再生産され続ける宗教表象

ザイプスの再話研究は、物語やそこに登場するキャラクターに留まらず、歴史、記憶、伝統、イメージなどといったあらゆる表象の再生産において、その時代の人々が共有する支配的価値観や社会の趨勢へ適応させる恣意的操作が行われてきた歴史を明らかにする。そこでは、誰がどのような立場の視線や背景から、いかなる意味が読みとれる表象を複製・改訂してきたのかという問題が論証の中心に据えられる。

こうした論究は、テキストやイメージの表現からコンテクスト (社会文化的文脈) を読みとり、

その意味内容に潜在する政治性、個人や集団の主観といった諸観念を暴くイデオロギー批判に分類される。メディアにより再生産され続けているある特定の表象は、いかなる社会とのつながりのなかで改訂されるのか。また、それによって変容した表象は、どのようなものとして具現化され、人々に受け止められるのか。

今日、このような問いは、ブッダの媒体表現を考察する研究においても、とりあげなければならない問題意識となっている。なぜならば、近現代のメディアが生成してきた仏教の人間像もまた、社会の規範や制度に即し、その時代の支配的な思想や慣例、人間の欲求、権力構造、世の有様などを反映しながら再生産されてきた表象だからである（図1）。

近代西洋の啓蒙思想や実証主義的な学術規範が世界規模で拡大し、超現実的な靈験奇瑞に懐疑的な眼差しが向けられた近代の日本では、仏教という信仰世界の捉え方にも大きな変化が生じる。そのなかで、ブッダという存在は、19世紀におけるヨーロッパの実証主義史学と高等批評のなかでイエス・キリストと対比され、一つの宗教を確立した実在の歴史的人物として再定義される。こうして形成された近代的ブッダ観は、同時代のメディア表現へも投影され、仏教を開いた創唱者としての教主像が流布されていく。

学術的知見、政治思想、生活習俗など、さまざまな制度的イデオロギーが織り込まれたキャラクターとして仏教的人物を表現する傾向は、僧侶、信仰者といったその他の仏教の人間に関する表象にも同じく見られる。メディアによって示されるブッダ像は、過去に実在した本人の生涯や記憶を忠実に再現したものとしてではなく、各時代の読者の関心や世相を反映して人工的に形成された「代替」的創作物となる。つまり、ブッダのイメージは、時代の諸観念に合わせ、嗜好形式、解釈の図式、観念や価値の体系、象徴形式、集団といった関連づけの枠組みに応じた形態、類型、イメージ、記号として表現されるのである。

本研究では、仏教絵本で表現されるそのようなブッダの諸相を手がかりとして、近現代という時代に展開するメディアを通じた宗教表象の再生産へと考察の手を加え、近代以降の日本人が共有する仏教観を明らかにしていく。

『おとぎ話が神話になるとき』において、ザイプスは、既存の権力関係を強化するものとして生み出してきた物語へ議論を加えるという、複製と改訂の再話に見られる二つの機能に着目している。実際、19世紀以降、知を正当化する支配的な言説の信憑性は次第に喪失し、メディアがもたらすさまざまな情報により生じた価値の多様化と、個人や集団の複雑な思惑のなかで、ブッダをめぐるイメージ（表象）の再生産は、続けられてきた。

ブッダ像の生成と再生産は、いかなる社会的背景のなかで起こり、そこにいかなる解釈と改訂が加えられ、教理教学だけではない、社会通念という暗黙の了解のうちに、何を認め、何を制限する表現が形成されたのか。また、この制限が破られる状況とはどのようなものなのか。

本研究では、そのような問題にも気を配りながら、フランスの思想家であるロラン・バルトのイデオロギー批評から影響を受けるジャック・ザイプスの再話研究を理論的基盤として、さまざまな個人と文化集団が連関し、視覚と言語が組み合わさる絵本というメディアで表現されたブッダ像が時代を映す鏡であり、人々に共有される仏教観を更新するイメージであることを考察する点に学術的意義を見出す。

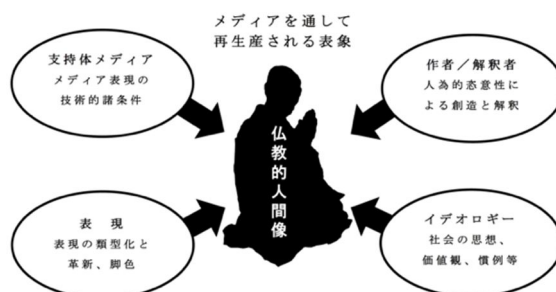


図1 仏教の人間像をめぐる表象が再生産される諸条件

本研究では、特に支持体メディア、表現、作者／解釈者、イデオロギーの観点から、ブッダのイメージ（仏教の人間像の表象）の再生産を考察する。

引用文献

- 長屋光枝、イメージの力 美術館からの視点、「イメージの力」実行委員会編、イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる、国立民族学博物館、2014、27。
 ジャック・ザイプス著、鈴木晶、木村慧子訳、おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ、新曜社、2001、11。
 ザイプス、前掲、おとぎ話の社会史、26。
 ザイプス、前掲、おとぎ話の社会史、26。
 ジャック・ザイプス著、吉田純子・阿部美春訳『おとぎ話が神話になるとき』紀伊国屋書店、1999年、27。
 ザイプス、前掲、おとぎ話が神話になるとき、p.29。
 ザイプス、前掲、おとぎ話が神話になるとき、p.30。
 井上昭洋、前掲、ハワイ人とキリスト教 文化と信仰の民族誌学（一四）表象と言説、9。
 下村直樹、広告分析における記号論、北海学園大学学園論集、138号、北海学園大学、2008、80-82。
 吉田香織、ファンタジーにおけるイデオロギー的意味作用の考察 アニメーション研究の見解と展望、立命館言語文化研究、22巻1号、2010、150。
 須川亜紀子、24 コンテンツ分析、岡本健編、コンテンツツーリズム研究〔増補改訂版〕アニメ・マンガ・ゲームと

観光・文化・社会、福村出版、2019、92-93.

林淳、総論 近代仏教と学知、末木文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一編、日文研叢書 ブッダの変貌 交錯する近代仏教、法藏館、2014、7-8.

4. 研究成果

(1) 人々へ影響を及ぼすイメージとしてのブッダ像

本研究で明らかにしたのは、近代日本の仏教絵本で表現されてきたブッダのイメージは、実在の本人そのものではなく、あくまでもメディアで表現される似姿(代替)であり、必ずしも過去に実在した歴史上の当人を忠実に再現しようとしたものではないことである。むしろ絵本で見られるブッダ像は、時代とともに移りかわる思想、価値観、世相、通念、習慣、政治、経済、制度、学術、階級、性別、芸術などのさまざまな社会的要因を反映し、人々の願望や要請に応じて、人為的に創りかえられてきた文化的産物である。

また、メディアを通して物質的に形象化されるブッダという記号は、メディアを介してそれに接した諸個人の思考・行動・情動に作用し、時に人々を制御し、煽動するイデオロギーであること。さらには、国家や教団などといった共同体の集団意識や行動原理の拠り所となる、真偽入り混じる 神話 となりうるものであることも明らかにした。

近代以降、メディアから溢れ出すさまざまなブッダのイメージは、実証主義的な歴史学にもとづく時代考証、ならびに仏教学・宗学における実証主義や聖典主義からの批判を受けるようになる。しかしそれでもなお、実在のブッダ本人を直接目にすることがない近現代の人々は、史実であることや科学的合理性よりも、現在の自分たちが欲するブッダを求めた。欧化政策を推進した明治政府側の出版人により文明開化の恩恵に預かろうとするブッダが表現され、19世紀末の西洋諸国からもたらされた近代仏教学は、実在した歴史上の人間ブッダを明らかにしようとした。現代になると宗教教育事業を展開しようとする仏教者たちが子どもたちと親しく接するブッダを創り出すのも、各時代に生きる人々が自分たちにとって必要なブッダであって欲しいと要請したからにはほかならない。だからこそ、メディアのなかのブッダ像には、改訂にともなう虚構の追加や削除という人為的操作がなされ、情報伝達により人々に浸透させていくことが繰り返されてきたのである。

メディアを用いて特定のイメージを諸個人に刷り込み、人々の行動に何かしらの影響を及ぼすというこのような行為は、宗教分野に限られたことではない。辻田真佐憲『「戦前」の正体 愛国と神話の日本近現代史』(講談社、2023)では、東京美術学校教授の竹内久一により明治天皇の顔を模した神武天皇の木造が造られたことを例にあげ、神武天皇の復活という明治天皇のイメージを創出したことを指摘する。また、戦前戦時下において天皇のための死を美化するために楠木正成の人物像が構築されていったことは、谷田博幸『国家はいかに楠木正成を作ったのか 非常時日本の楠木崇拜』(河出書房新社、2019)に詳しい。

先にあげた二つの文献は、いずれも意識的に、あるいは無意識のうちに国家権力の正当性を国民に刷り込むために、メディアイメージを利用したことを明らかにしているが、ブッダのイメージにも人々へ何かしらの思想や価値観を植えつけていく同様の機能が見出せる。情報化社会と呼ばれて久しい昨今、世界は、メディアを通して膨大な数のイメージが溢れる時代をむかえている。そのなかで本研究の社会的意義を示すならば、現代におけるPRやブランディング、観光振興などにおけるメディアを用いたイメージ戦略の諸問題にも応用可能であるという点であろう。

(2) 本研究の学術的意義

最後に現在の仏教研究に与えた本研究の学術的意義について述べることにしたい。この取り組みにおいてもっとも大きな研究成果となるのは、2020年に東京・勉誠出版より刊行された森覚編『メディアのなかの仏教 近現代の仏教的人間像』である。これは、本研究が採択された2016年の時点から進めてきたメディアにおける仏教表象の形成と再生産をテーマにした出版プロジェクトだが、執筆期間中には、本書の共著者である大澤絢子氏が同様の観点から親鸞のイメージを考察した『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』(筑摩書房、2019)を上梓した。

また、2023年には、京都・法藏館より大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『増補改定 近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代』が刊行された。本書は、同じく大澤氏の「語りなおされる宗祖1 親鸞像」と、ユリア・ブレニナ氏による「語りなおされる宗祖2 日蓮像」という二つの論考を収録するが、そのいずれも本研究を通して提示することができた改訂の再話によるブッダ・宗祖・高僧などの仏教的人間像をめぐる再生産という理論にもとづいている。

さらに新たな研究成果として、2023年度内に京都・法藏館から『読んで観て聴く 近代日本の仏教文化』を刊行する予定である。本書は、言語・図像・音響・動画などのメディア表現や記録の考察を手がかりに、近代仏教研究の領域であり顧みられていない近現代の日本における民衆社会に焦点をあて、読み・観て・聞くという行為を通して、知的エリートだけではなく、さまざまな場の人々が創造し、一般社会の人々がメディアから受容した仏教文化の諸相を探る研究論集である。各章の論考により、メディア表現を読み・観て・聴くことを通じて人々が接し、創り出してきた仏教文化を探り、近世から近代、そして現代へといたる宗教表現の継続と断絶、ならびに近代仏教の展開へ果たしたメディアの役割について明らかにすることがその目的となる。

メディアが表現する仏教イメージ論は、学術的な広がりを見せている。今後、同じ問題意識を共有する考究の一助として、本研究成果が役立てられれば幸いである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森 覚	4. 巻 27
2. 論文標題 近現代の日本におけるジャータカ絵本の成立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 仏教文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 pp.77-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 覚	4. 巻 26
2. 論文標題 仏教絵本『こどものくに別冊 おしゃかさま』にみるブッタのイメージ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 仏教文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 pp.83-106.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 覚	4. 巻 10
2. 論文標題 仏教絵本『佛教聖典おしゃかさま』にみるブッタの表象 仏教とキリスト教との混合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 形の文化研究	6. 最初と最後の頁 pp.1-13.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 覚	4. 巻 43
2. 論文標題 明治十五年の草双紙『開化地獄論』 啓蒙主義と仏教	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大正大学総合佛教研究所年報	6. 最初と最後の頁 pp.169-195.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口恵子, 森 覚	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 仏教絵本「おしゃかさま どこに おいでになるの」におけるブツダの表象 仏教絵本における武市八十雄の影響	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 新潟青陵学会誌	6. 最初と最後の頁 pp.1-11.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森 覚
2. 発表標題 はなまつりと仏教絵本
3. 学会等名 仏教文化学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森 覚, 永吉敦郎, 山口恵子, 前田君江
2. 発表標題 ラウンドテーブルB 宗教と絵本 仏教・キリスト教・イスラーム教の絵本を通して
3. 学会等名 絵本学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 覚
2. 発表標題 再生産される宗祖像 メディア、表象、記憶
3. 学会等名 「近代と仏教」研究会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森 覚
2. 発表標題 仏教聖典シリーズにみる友松円諦の思想 『おしゃかさま こども繪本版』と『えものがたりおしゃかさま 児童版』を中心に
3. 学会等名 日本近代仏教史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森 覚
2. 発表標題 明治15年の草双紙『開化地獄論』に表現された文明開化と仏教
3. 学会等名 繪本学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森 覚, 中川素子
2. 発表標題 仏教繪本『こどものくに別冊 おしゃかさま』にみるブツダのイメージ
3. 学会等名 繪本学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森 覚
2. 発表標題 地獄と極楽～いま、その意義を問い直す
3. 学会等名 佛教文化学会第26回学術大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森 覚, 大澤絢子, 高橋洋子, 嶋田毅寛, 渡辺賢治, 渡辺隆明, 猪股清郎, 大道晴香, 今井秀和	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 352
3. 書名 メディアのなかの仏教 近現代の仏教の人間像	

1. 著者名 今田由香, 大島丈志	4. 発行年 2016年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 絵本ものがたりFIND 見つける・つむぐ・変化させる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・データベース 仏教児童メディアデータベース http://morikaku.com/db/index.html</p> <p>・公開講座 森 覚「仏教絵本の歴史と展開 絵本『とげぬき地蔵さま』を中心に」豊島区 / 仏教資源研究会 豊島区生涯学習 としま仏教Culture研究会、豊島区民広場西棟 鴨第一 2016年6月25日。 森 覚「仏教絵本の誕生」仏教文化資源研究会第4回らん仏教文化講座、天恩山五百羅漢寺、2018年4月7日。 森 覚「明治15年の草双紙『開化地獄論』 啓蒙主義と仏教」日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)18K00064「近代仏教学は「トランスナショナル」なのか 皇道仏教・戦時共学に関する基礎的研究」共催企画公開研究会「仏教とメディア表象」、Zoom、2020年9月19日。 山中智省、森 覚、渡辺賢治「2022年公開シンポジウム 仏教絵本からライトノベルまで 異世界・地獄・天国」、オンデマンド、2022年8月28日。 ・報告書、書評、短報。 森 覚「[公開講座要旨] 仏教絵本『佛教聖典おしゃかさま』にみるブツダの表象 仏教とキリスト教との混合」(『大正大学総合佛教研究所』39号、2017年) pp.309-310。 森 覚「問題提起：この世の写し鏡としてのあの世 仏教絵本に見る地獄」(『仏教文化学会紀要』26号、2017年) pp.22-30。 森 覚「ジャータカものがたり はじめてのともだち 生まれ育った環境や生物の種を越えた友情物語 「再話」によって、同時代的なメッセージも物語に組み入れられる」(『図書新聞』3424号、武久出版、2019年) p.6。 森 覚「ラウンドテーブルB 宗教と絵本 仏教・キリスト教・イスラーム教の絵本を通して」(『第22回絵本学会大会報告書 絵本と教育 メディアとしての絵本、その魅力と多様性を探る』第22回絵本学会実行委員会、2019年) p.12。 森 覚「書評 大澤絢子 親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたか」(『近代仏教』第28号、日本近代仏教史研究会、2021年) pp.158-162</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	木村 真弘 (Kimura Masahiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------